

モノづくりのまえに人づくり

——経営をまかされて最初に手をつけたのは就業規則や人事システム。技術畑出身のトップとしては意外な切り口ですね。

並木…会社が苦しくなっても改革ができなかったのは、創業から苦楽を共にしたメンバーが大半でしたからでしょうね。様々な金属加工ができるようにと過剰となった設備もさることながら、それ以上に大きいのは硬直した内部組織の問題でした。旧来の職人気質の組織を近代的な活性化された組織に変革させるためには人事制度に着手せざるを得ませんでした。

私は非常識といえるほど経費カットを行い、時間をかけてリーダーを育て、権限を委譲し、組織化を進めていきました。そして総合的な人材開発と評価制度を作ったのですが、この過程で旧来の意識から抜けだせない社員は残念ながら辞めていってしまいました。

——そういう改革を大胆にやった。自分のやり方に不安はありませんでしたか。

並木…ないというより、それは私の信念だったので泣きながら貫き通しましたよ(笑)。会社は社会に貢献するのが目的ですが、なおかつ各人の



術があるが故にかえって捨てられなかったのです。それで思い切った多くの設備、機械を処分して板金と製缶に特化しました。そしてようやく三つの過剰が落ちてきたのです。

世界中のパンのカタチを変える キャラバンモード事業

——次の課題は何でしょうか。

並木…組織も新しく加わった若い人を中心に活性化され、ベテランたちも明るく元気です。ベテランの中には74歳の人もいるんですよ！老若男女、和気あいあいとやっています。ですから「人づくり」は順調です。

次の課題は、やはり自社の加工技術を礎にしたカタチある情報発信ですね。つまり製品戦略を一段階進めて、自社製品の販売事業を展開しようと考えています。

——新規事業を含めて、今後の事業展開は具体的にどんなことをお考えですか。

並木…二つ考えています。一つは従来からの事業であるサポートインダストリーとしての成長。この分野では、さらに領域を絞って溶接(接合)の分野で差別化された真似のできない高度な加工技術を持つと考えています。

もう一つは自社製品の製販です。これには二つありまして「キャラバンモード事業」と「パーソナルブランディング事業」があります。前者は全社を挙げての取組みで、後者は個人ベースの取組みです。

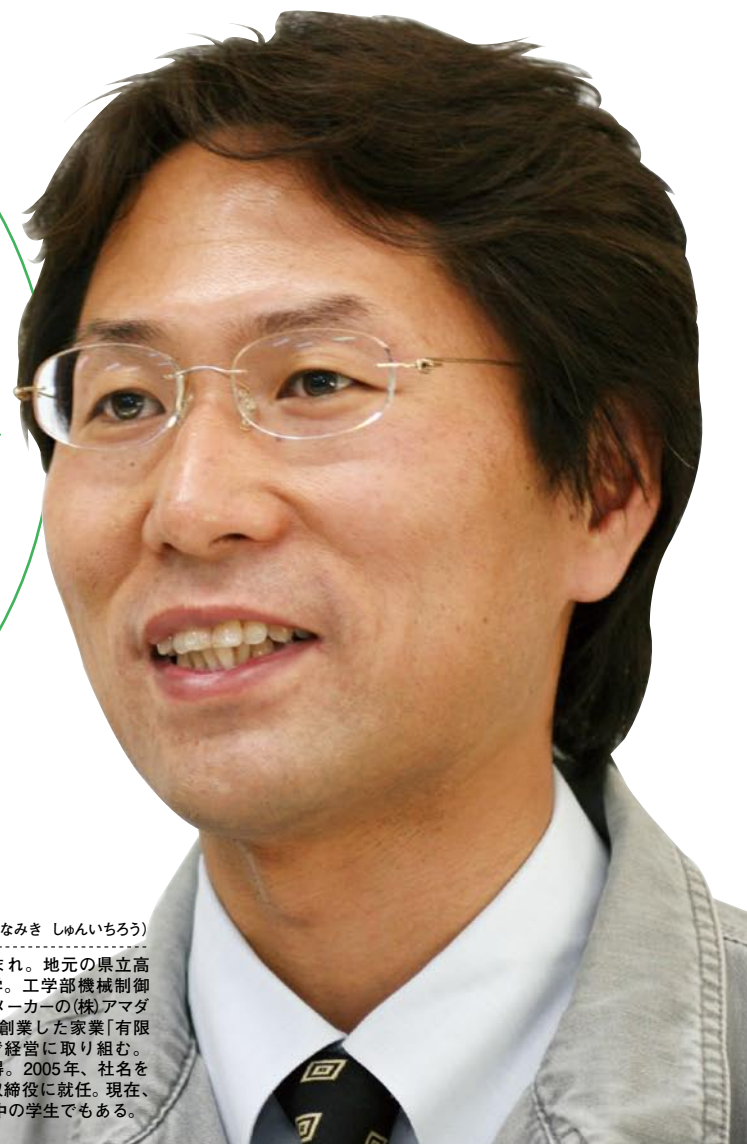
「キャラバンモード事業」とは、製パンのモード(型)の事業のことです。パンには洋菓子みたいな意匠性に富んだ型がないということに気

日本人の モノづくりには 魂が宿る

IMC 代表取締役 社長

並木 俊一郎

なみき しゅんいちろう



Profile 並木 俊一郎 (なみき しゅんいちろう)

1965年、茨城県古河市生まれ。地元の県立高校から東京工科大学へ進学。工学部機械制御工学科を卒業後、NC機械メーカーの(株)アマダに就職。95年、父・英彬氏が創業した家業「有限会社 並木工業所」を継いで経営に取り組む。2000年、ISO9001認証取得。2005年、社名をIMC株式会社と改め、代表取締役に就任。現在、慶應義塾大学経済学部在学中の学生でもある。

ずっしりと重いステンレス製の砂時計を、並木は嬉しそうに手に取った。入社後、まず手掛けたのは会社の再構築。それによりやく目処がつき、自分が考えていた構想に着手できる喜び。その思いの一部を凝縮したものが、この金属フレームの砂時計なのだろう。並木へのインタビューを机上の砂時計はずっと見守っていた。

ようやく落ち着いてきた 三つの過剰

——モノづくりの基盤は先代が築いてきたんですね。

並木…父の口癖は「他人の真似はしない」でした。いつも「Make Different」の精神を説いていた記憶があります。そのモノづくりの哲学はいまも脈々と生きていますし、それが一番の強みですね。お客さまの言う通りに作らない(笑)。こうした方がもつというとか、安くなるとか。

しかし、一方で精密板金から製缶、プレス、鉄骨、機械加工、塗装と様々な加工を社内で行うために、設備・債務・製品領域の三つが経営規模を超えて過剰な状態に陥りました。お客さまはたいへん便利ですが、これが力を分散させる原因だったのです。いま流行りの板金ゼネコンみたいなことをやっていた。ですから、一番得意なものに特化し、力をそれに集中させたわけです。

——事業の形態そのものを変えたわけですね？

並木…事業の形態そのものを変えたわけではなく、製品戦略を見直し、その領域を絞込むことによって類似製品同士の相乗効果が図れるようにしました。あれもこれもやろうとすれば総花主義に陥ります。当社は技



ンディング事業は、誰にでもチャンスが開かれていますから、当社に就職した人は、ぜひ挑戦してもらいたいですね。

——新事業はともユニークで夢がふくらみますね。最後に、学生の皆さんにメッセージをお願いします。

並木…日本人がなぜモノづくりが上手いのか。古の神代の時代、「モノ」は神と同意語だったといわれています。だから、日本人のモノづくりには、そこに「モノ(神)」を創出するニュアンスがあります。モノづくりは我々日本人の「レゾナント」なものです。モノづくりを通じて自分を表現できる大きな可能性を信じて欲しい。そしてその表現したモノで人に喜びを与えられれば、きっと素晴らしい人生を歩んでいけると思

います。

※ レゾナント
ある物が存在すること
の理由。存在価値。

「パーソナルブランディング事業」とは、社員がデザインした製品を本人の名を公表して世に出していく事業です。その目的は、**社員の自己実現**をモノづくりの面からサポートすること。そんな夢のある**新しいモノづくり**を実現したいと考えています。



づいたことがありますか？いま当社が開発している製品は世界中でどこも出来なかったパンの型をとてもしンプルな発想で実現しています。世界中のパンのカタチを変えようと日々

モノづくりの実績が 次の価値を生み出す

——こういった新事業も従来技術の蓄積があったからなんです。

並木…そうですね。新規事業は板金技術を礎としていますから、それになにかを組合せれば新しい価値創造となります。とくにパーソナルブラ

- 乗っている車……………ステップワゴン
- おススメ本……………福翁百話
- 家族……………4人
- 今までに訪れた国……………7カ国
- 座右の銘……………東照公遺訓
- 購読雑誌……………「NIKKEI DESIGN」他6誌
- 尊敬する人……………モノづくり会社の社長さん達
- 好きな食べ物……………和食
- 嫌いな食べ物……………なし

The Management Data File 経営者データファイル

お名前……………並木 俊一郎
生年月日……………1965年
茨城県生まれ
身長……………180cm
体重……………73kg
平均睡眠時間……………5時間
平均起床時間……………午前6時
趣味……………サッカー、スキー、サーフィン

会社概要 IMC 株式会社

所在地……………茨城県古河市東山田2635-1
創業……………1967年(昭和42年)10月
資本金……………1,000万円
事業内容……………精密板金及び精密製缶加工、機械加工や各種表面処理も含む製品の製造販売
従業員数……………20名
URL……………http://www.n-imc.co.jp



就職情報は
コチラ